

もう一つの「新しき村」



—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

今年1月21日号の本コラムで「野良の言葉が持つ力」を寄稿したが、その「言葉」の主であり、子どもたちの田植えや稲刈り体験の場も提供する「洗心道場」を主宰しておられたHさんが、発行間もない24日、90歳を目前にして突然亡くなられた。当日もお元気で、夕食をとり、談笑してからお風呂に入り、そこで亡くなられた。大変残念ではあるが、見事な逝き方でもあった。

そのHさんは大のマスコミ嫌いで、いっさい取材に応じることはなく、私がHさんに頼んで個人的にメモをとらせてもらってきたもの以外、Hさんが語った言葉はどこにも残ってはいない。先のコラムもあえて「Hさん」という匿名にすることで了解を得、紹介させていただいたものである。

Hさんのご逝去にともない、何とかHさんの言葉を残し伝えていきたいということで、ご遺族にお願いご相談させていただき、間もなくの田植えの時期に合わせ、実名も出して「林金次語録—基本を尊ぶ」を私家版として発行し、関係者に配布することをお許しいただいた。残された資料を調べたりする中で、洗心道場は未完の超長編の剣豪小説「大菩薩峠」で知られる大正・昭和初期のベストセラー作家であった中里介山が、「農業を主体とする自給自足の塾教育」を生涯の目標として具体化させた「西隣村塾」を現代によみがえらせることを目指して立ち上げたものであることが分かってきた。

介山のまな弟子で「西隣村塾」の塾生でもあった元読売新聞記者・柞木田龍善（たらきだ・りゅうぜん）氏が、1990年ごろのこと、「介山居士が遺髪と遺品を小説大菩薩峠ゆかりの地に残してほしいとの遺言により、それを実現するために、遺髪を納めたつぼと遺品をリュックに背負い（大菩薩嶺に）登って来た」ところ、「夕暮間近に迫って来てとまどう中で、折よく（温泉旅館）雲峰荘を見つけ（雲峰荘社長の）林氏と出会い、一面識もない林さんに相談を持ち掛けたのが、介山記念館と洗心道場立ちあげることの始まりとなったものである。

念のためと調べてみたところ、介山は「新しき村」運動の中心であった作家・武者小路実篤とくしくも同年生まれであることが判明。武者小路が宮崎県児湯郡に開村したのが1918年。介山が西隣村塾を開いた



田舎体験教室で子どもたちに話を
する林さん（左）

のが30年。介山が「新しき村」を意識しなかったはずはなく、あえて別の道を歩んできたわけで、庶民的なところに足場を置くとともに、「塾教育」、特に子どもを重視するところに理由があったのではないかと推測する。そして柞木田氏と林さんが一緒になって議論を重ねながら、この西隣村塾の現代版として洗心道場を構想したことはまず間違いない。

洗心道場で、介山と林さんの思いは重なっており、洗心道場はもう一つの「新しき村」運動の“場”とみることもできる。98年春に介山記念館をオープンし、2000年から洗心道場としての活動を開始しているが、99年にはNPO法人・介山大菩薩会を立ち上げている。実質は会員による共同運営によって田植えや稲刈りの農業祭は開催されており、林さん亡き後も活動継続に支障はない。洗心道場に込められた思いをかみしながら子どもたちの農業体験を続けていきたい。



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕

「未来を耕す農的社会」「農的社会をひらく」「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）
「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など